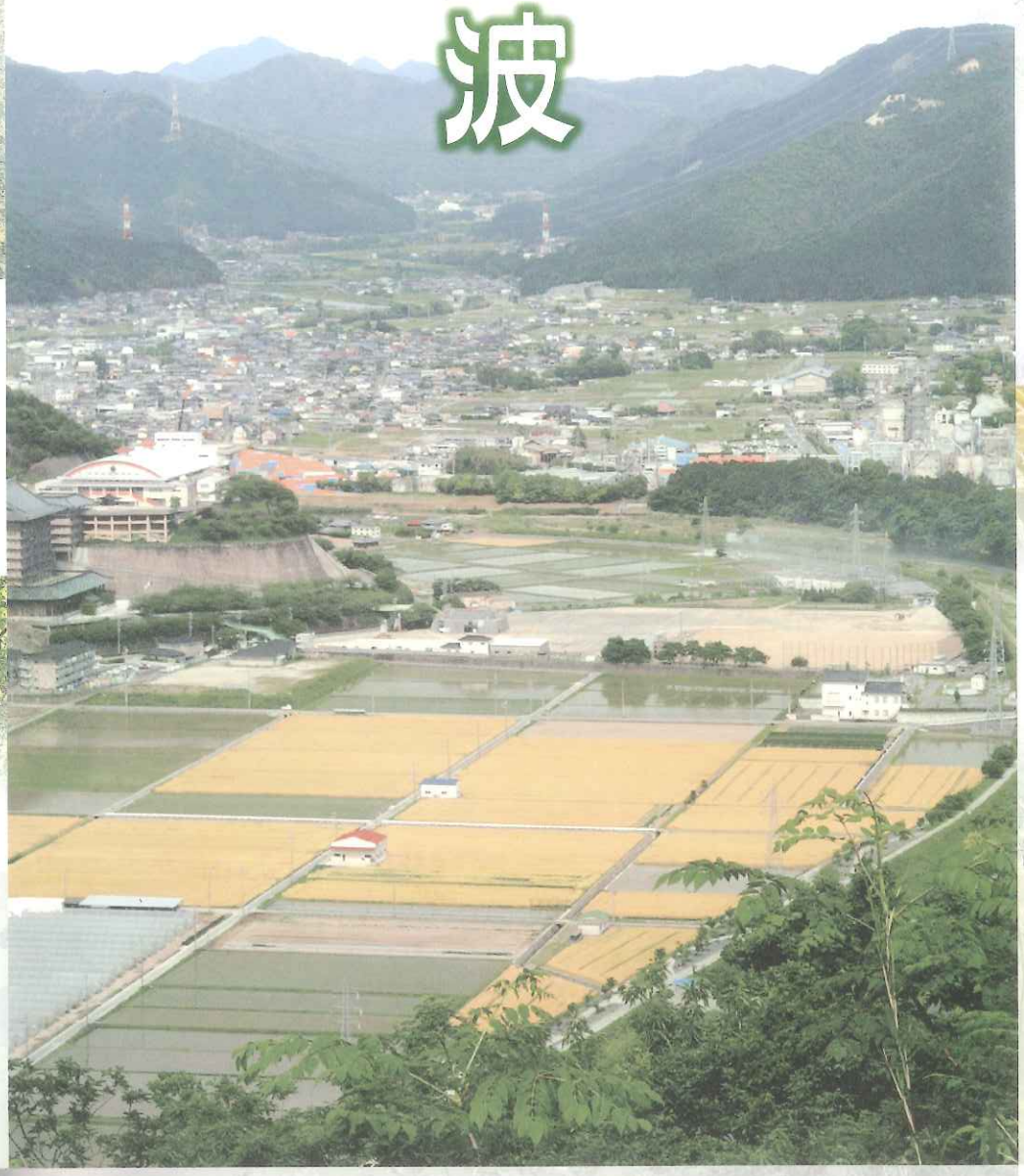
人権啓発冊子No.3

じんけん丹波



丹(まごころ)の里

丹波市

人権文化を育む豊かなまちづくり

世界人権宣言

世界人権宣言は、第二次世界大戦で起こった悲劇を二度と繰り返さないという反省から1948年12月10日に第３回国連総会において採択されました。人権が「世界における自由、正義、および平和の基礎である」（世界人権宣言前文より）ということを確認しています。また、1950年の第５回国連総会において、毎年12月10日を「人権デー」と定め、世界中で人権思想の普及･啓発の行事などを行うよう呼びかけています。

世界人権宣言（抄）

第１条

すべての人間は、生まれながらにして自由であり、かつ、尊厳と権利とについて平等である。人間は、理性と良心とを授けられており、互いに同胞の精神をもって行動しなければならない。

第２条

１　すべて人は、人種、皮膚の色、性、言語、宗教、政治上その他の意見、国民的若しくは社会的出身、財産、門地その他の地位又はこれに類するいかなる事由による差別をも受けることなく、この宣言に掲げるすべての権利と自由とを享有することができる。

２　（略）

第３条

すべて人は、生命、自由及び身体の安全に対する権利を有する。

発刊にあたって

世界人権宣言が採択されてから、今年で60年になります。この宣言の採択を契機として、国際的な規模で人権を保障しようとする取り組みが展開され、人権尊重が世界の潮流となりました。国内でもすべての人の人権尊重に向けた様々な取り組みが進められています。

人権尊重の精神が日々の生活の中に浸透した社会を築くため、還暦を迎えたこの世界人権宣言を改めて確認したいものです。

今日、景気や雇用状況は回復したといわれているにも関わらず、ネットカフェ難民、派遣社員と言われる人たちが正規雇用されずに、生活格差が拡大しています。こうした中、児童や高齢者虐待、いじめや自殺、詐欺、インターネットによる中傷など、人権侵害・差別に関わる問題が多岐にわたって起きています。

丹波市における少子高齢化は一段と進み、依然として厳しい生活環境が続いていますが、市民の努力により、地域再生に向けたコミュニティーづくりや各自治会の人権学習も引き続き開かれ、人権意識の高揚が図られています。

丹波市では、市民の皆さんが、日常生活の中で、お互いの人権を尊重することをあたりまえのこととして、考え、行動することをめざして「人権文化を育む豊かなまちづくり」の取り組みを進めています。そして、市民相互が豊かな人間関係を構築し、地域活性化に向けた主体的な取り組みが求められています。

そのための啓発活動の一環として、「じんけん丹波」（No. 3）を発行いたしました。人権学習の資料としてご活用ください。

平成20年２月

丹　波　市

もくじ

人権絵手紙 …… 1
命の尊さと生きる権利 …… 2
格差社会が投げかける人権問題 …… 4
みどりの風の中で …… 6
ユニバーサル社会をめざして …… 8
住みなれた家で死ぬということ
～あなたの家にかえろう～ …… 10
兵庫県に暮らす外国人労働者へ温かい眼差しを …… 12
差別は誰を不幸にしているの？ …… 14
自由な心、認め合う関係、いきいきライフ
～男女共同参画社会からの贈り物～ …… 16
介護難民が生まれる根を絶つ道 …… 18
中学生人権作文 …… 20
人権絵手紙 …… 22

（荻野信江）

（亀田百合子）

命の尊さと生きる権利

神戸大学名誉教授・愛知学院大学法科大学院教授　芹田　健太郎

六月十七日、わが家に、横浜に住む次女のＳＯＳで、モモがきた。名前は孫たちがつけた。マンションの昇降二段式の駐車場の地下からかすかに泣いた一声で拾い上げられた二四十グラムの子猫。なぜか、右の後足が、膝下で切れて、無い。歩くと少し痛がり、血がにじむ。獣医に診てもらうと、一キロを超え体力がついたところで、太ももから切断し、完全な三本足にするのがよいとのこと。毎日四十～五十グラム増える。早く太れ、と食べさせ、反面、足が無くなりかわいそう、そんなに急いで大きくならなくともいいよ、とも思う。とうとうその日が来て、二週間後に抜糸。跳ねるように走る。大人の先輩猫たちを三本足で追う。三本足でじゃれる。爆発的な生命力だ。その生命力の強さに圧倒される。

その昔の子育てを思い出す。胎児が動くと、ぷくっと、おなかが小さく盛り上がる。ほら、今伸びをしている、と母親は言う。二八十日を経て外に出ていかにも頼りなげに泣く。見えていないだろうに、お乳を求めて、力強く吸う。手に触れると力強く握る。甘ったれで、泣いてばかりいたと思う間もなく、はいずり回り、伝い歩き、走り回る。話し始めたと思えば、憎たらしく、手に負えない反抗児。その早いこと。今では一場の夢のようだ。

思えば、人は人から生まれる。〇・二ミリにも満たない一個の卵子とさらに小さい射精された一億の精子のうちの一個の精子が出会い、受精卵の初めての細胞分裂から始まって次々

に分裂を繰り返し、人となる。世に出て、肉体的に大人になっても、その成長は、精神的にはとどまるところを知らず、肉体的生命を終えるまで続く。一個の受精卵は、どうして、いつ、精神的な知的な存在になるのであろうか。ひとりの人の受精・誕生・成長の中には連続と飛躍がある。

生命としては、猫も犬も、草木も、一回限りで、平等である。地球が誕生したのが四十六億年前。地球に生命が誕生してから四十億年。私たちの身体には水分もあれば鉄分など無機物もある。地球誕生以来のすべてが私たちの中にはある。生命の誕生から今日までを一月一日から十二月三十一日までの一年に例えると、人が誕生したのは十二月三十一日の除夜の鐘が鳴り始めて次の一月一日がまさに来ようとする頃となる。

人は胎内で魚類や両生類や爬虫類やの過程を通してくる、といわれる。私たち現生人類は十万年前にアフリカから世界中に広がった。女から女へと受け継がれるミトコンドリアＤＮＡの調査と、男から男へと受け継がれるＹ染色体を調べていくことによって分かってきた。今の私の存在は直接的には父と母の出会いによるけれども、そうした一人の男と一人の女の出会いの連綿とした積み重ねの上に、今の私がある。まさに奇跡である。

六十五億人の地球人の中に、私はたったひとりしかいない。たったひとりだけれども地球のすべての歴史が凝縮されている。しかも、私たちは毎日食さなければ生きられない。米や麦、野菜を取り、肉や魚を食べる。すべてそれぞれの命をもっている。私たちは、食前に、いただきます、と言う。私たちは食物連鎖の頂点にあり、毎日他の生命をもらっているのだ。だから、ひとりの人の命が失われると、その人に凝縮されたすべての命が失われる。ひとりの人はそれほど尊い。

人として生きることは、皆を生かすこと。私たちは生きなければならないし、生きる権利がある。生命権はすべての人権に優位する権利である。憲法も条約もこれを先ず保障している。社会の隅々までこのことが実現されなければならない。

格差社会が投げかける人権問題

神戸大学発達科学部教授　二宮厚美

格差という日本語は外国語に翻訳しにくい言葉です。強いて英語に置き換えようとすれば、不平等（inequality）とでもいうほかない、というのが通説です。だから、格差社会とは不平等社会と言いかえられます。その不平等社会のありさまを典型的に物語るのが、ワーキングプア（働く貧困層）と呼ばれる人びとの増大です。

ワーキングプアは、〇六年、ＮＨＫスペシャルが二度にわたって取りあげて以来、多くの人びとの関心を集めるようになりました。たとえば、駅周辺のゴミ箱からまだ新しい週刊誌等を拾い集め、業者に売って飢えをしのぐ青年。彼は一冊五十円で売れる雑誌八冊を集めて四百円稼ぎ、そのお金でコンビニ店からインスタント焼きそばを買い、飢えをしのぎます。若者ばかりではありません、京都の老夫婦は朝早く、分別収集のアルミ缶をかき集めて、その販売代金で生計を立てます。通常の缶ビールの空き缶は、一個あたりわずか二円。この収集で生きていくのは大変なことです。ＮＨＫスペシャルは、いま全国に広がるワーキングプアのこうした実態を生々しく伝えて、マスコミの話題を呼んだのです。

ワーキングプアとは、働いても働いても、その稼ぎでは生活保護以下の生活しかでき

ない人びとのことをさします。この人たちは、現代日本でおよそ五百万人以上に膨れあがったと推定されているのですが、これは格差社会が同時に深刻な貧困をともなう社会だということを物語るものです。人権概念にそくしていうと、格差が平等という人権の侵害を意味することは言うまでもありません。では、貧困とはいかなる人権を侵害していることになるのでしょうか。その答えは、自由の侵害である、と私は考えます。

貧困とは、人間から自由を奪いとる事態なのです。たとえば、〇七年七月、北九州市で生活保護を打ち切られた男性のミイラ化した死体が発見されました。餓死によるものでした。どん底の貧困は、まだ五十二歳の男性から、生存の自由を奪いとったのです。ホームレスやネットカフェ難民と呼ばれる人たちには、居住の自由はありません。また、日雇い派遣で働く若者には、事実上、職業選択の自由はありません。さらに、「教育貧乏」を強いられる家庭の子どもは、進学の自由を奪われているといって過言ではありません。

近代社会の人権は、周知のとおり、自由・平等を出発点にしました。現代日本の格差社会化は、近代的人権の中核に位置するこの自由・平等を二つながら同時に侵害している、ということになります。ただし、この場合の自由とは、生存の自由とか教育の自由、また労働の自由といった社会権的な自由です。つまり、社会が保障していかなければならない生存・教育・労働の自由を意味します。これらの自由は社会保障によって守られるものです。格差社会の問題は、社会保障の力を高めて自由・平等の人権を守っていかなければならないことを教えているのだ、と私は思います。

みどりの風の中で

兵庫県森林ボランティア団体連絡協議会・ブナを植える会
会長　桑田　結

みどり豊かな丹波路の皆様。このみどりの森林は健全でしょうか。最近、森林へ足を運ばれた事がありますか？観察会、ハイキングといろいろな機会があったと思います。今日の森林の多くは、メタボリック症候群のような不健全な環境にあります。それは、大きな災害を招く危険な状況にあります。早く健全な対応が望まれるのであります。

昭和二十年代、それ以前は私たちの生活のため、農業のために森林の恵みを大事に使っていました。その後、化石燃料・化学肥料が使われるようになって、人々は里山から離れてゆきました。その後里山は、里山放置林となって現在に至っています。

更に、拡大造林の政策によって建築用材となる針葉樹の植林はすすみ、寺社林を除き人工林の山々となってしまいました。その後、外国産材が普及して国産材の販路は狭まり、維持管理の費用が出ない位の窮地に陥り、これも放置林状況にあります。

数年前の台風により、大きな森林被害を受けた兵庫県は緑税を時限立法して、ひょうごの森を守ろうと立ち上がりました。県下各地で事業がはじまりました。林業にお

いては即効的な成果は見る事は出来ないが、その施業によって確かな未来が約束されているのであります。ふるさとの森林づくりは、行政だけに頼るのでなく、私たち市民も力を合わせて健全な森林づくりに協力したいものです。

私たちは、無意識のうちに環境という言葉の中で生活しているのであります。空気・水・大地と無機質な環境の中で生かされています。これらに無関心でよいのでしょうか。無関心ほどこわいものはないのです。安全といわれた日本の町々が、今では昔ほどに安全ではないのです。これと同じように私たちは、もっと日常生活において環境に配慮することが望まれるのであります。今一番大きな課題は温暖化ガスの削減というテーマであります。京都議定書制定は、諸外国にリードされ、日本が環境政策の仲間入りしたスタートラインだったのです。それ以来、環境政策は充実して大企業を中心に環境に配慮した操業は大いに成果をあげ、今では環境企業では世界をリード出来るようになりました。しかし、市民生活では温暖化ガスの排出は増え続けています。

市民生活での省エネルギー生活は、これからの環境政策の中で一番大きな課題となると思います。これを解く一つの鍵が、近年始まった環境教育だと思います。

小学校から中学校と、自然の中で、自然環境の仕組み、小生物を通じて生命の尊さを修得します。野、山、川で遊ぶ事により自然の中での生活感を修得して、人間も他の生物と同じ環境に生きる生物である事を自覚して欲しいのであります。風の冷たさ、空の青さを肌で感じられる人になって欲しいのです。

豊かな自然、青い空は人々の努力で維持・再生されるものだという事を共通認識として持って欲しいものです。

ユニバーサル社会をめざして

社会福祉法人プロップ・ステーション
理事長　竹中ナミ（ナミねぇ）

「すべての人が持てる力を発揮し、支え合うユニバーサル社会の実現をめざそう！」というのがプロップ・ステーションの目標ですが、「ユニバーサル社会って、よう分からへん」というのが、多くの人の率直な気持ちやないでしょうか。実は「よく分からない」最大の理由は、日本が残念ながらユニバーサル社会をめざして来なかったことにあります。

プロップは十六年前から、チャレンジド（障害のある人）がパソコンやインターネットなどを駆使して、在宅で介護を受けながらも働ける社会を実現するために活動を続けてきましたが、私たちの考えは活動発足当時、社会全体からみると全く異端なものでした。たくさんの人から「重度障害者が働くって、なに言うてんの。そんな人は社会が優しく助けてあげるべきで、働けなんて言うのは大間違いや！」と言われました。

でもプロップでは「重い障害があって家族の介護を受けてるけど、働いて稼いで社会に貢献もしたいんや！」というチャレンジドが集い、それを実現する道筋を自分たちで開拓してきたのです。

今では「障害者が働けない社会って、おかしいんちゃう」「作業所であんな低収入しか得られへんのは、どうやのん」といった言葉が日常的に交わされる時代になりました。私は時代がユニバーサル社会を求め、近づきつつあることを実感しています。

「自分が持てる力を発揮し、誰かから（あるいは社会から）期待される存在である」とい

うのは、生きる誇りに繋がることです。つまりユニバーサル社会というのは「どんな人の力も眠らさずに生かすことのできる社会」と同義語です。

私は三十四年前、重症心身障害の長女を授かりました。娘は「生後三ケ月未満の精神発達」という判定を受け、今もまだ私を「母親」とは認識できない状態です。でも彼女を授からなければ「元ワルで、非行少女のハシリと世間で言われていた私」が、「プロップのナミねぇ」に育つことは考えられないわけですから、「私は娘のおかげで更生した！」といって過言ではありません。私にとって彼女は「かわいそうな存在」ではなく「誇らしい存在」です。

彼女を通じて出会うことの出来た、たくさんのチャレンジドが、娘よりずっとずっと出来ることがあるのに、障害を理由に「働けない人」と決めつけられていることに、私は疑問を感じずにはいられませんでした。「どうしたら一緒に学べるか」「一緒に働けるか」という視点を持ち、そのシステムを作り上げることこそが、ユニバーサル社会構築の一歩や、と気づいたことが、私のプロップ活動の出発になっています。

そして私の究極の目的は「一人でもたくさんの人が、誇りを持って社会を支える側に回れるシステムを創って、私自身は、娘を残して安心して死にたい！」ってことです。

ユニバーサル社会の具体例は、たとえば学校にスロープを付けることはバリアフリーですが、そこでチャレンジドや高齢者が教師になれる、校長先生にも経営者にもなれるチャンスとシステムがある、というのがユニバーサル社会です。

先進諸国では、十五年前くらいからすでにこのような考え方で法律が整備されていますが、日本はまだ緒に就いたばかりです。でも私は「日本人はきっと、その気になったら、どこよりも優れたシステムを創造することができる！」と信じて、プロップの活動を続けています。

チャレンジドも高齢者も、全ての人が誇りを持って生きられるようになったらいいな！

あなたの街でも、ユニバーサル社会への一歩を踏み出してみませんか！？

プロップの活動の詳細は、公式サイトで公開していますので、ぜひ見てね！

http://www.prop.or.jp

住みなれた家で死ぬということ

～あなたの家にかえろう～

さくらいクリニック　桜井　隆

あなたもわたしも
　仕事が終われば家へかえる
それと同じように
人生という仕事が終わる時は
　家にかえろう

病院で死ぬ人が八十四％を超えてなお増え続けている。日本で病院死が在宅死を超えたのは一九七八年、たった三十年前のことだ。欧米でさえ三十～四十％が自宅で死ぬというのに、日本人の病院死だけが突出して多い。おそらく人類数千年、悠久の歴史の中で、そして世界中で十人中八人以上が病院で死ぬのは二十一世紀の日本だけだろう。なぜ、日本人はこんなに死ぬことを病院に、医療にまかせて日常から隔離してしまったのだろうか？

二十世紀の後半、科学の進歩はめざましく人々はさまざまな恩恵をこうむった。医学も例外ではなく感染症を克服し、癌治療そして臓器移植、遺伝子治療、再生医療ともっと高く、遠くへと命を伸ばすことばかり考えて来た。しかし結局最後に人は死ぬ、着陸しなければならない、そのエンディングをやさしく支えるというホスピスケアの概念がないがしろにされてきた。

「生、老、病、死」のすべてを病院という箱のなかにおしこめて医療で管理し、日常から喪失させてしまった日本。多くの人が死に逝く臨終の場を見たことがなく、看取りの作法そのものが

失われてしまった。看取りの文化が三十年というブランクを経て日常から消え去り、病気や障害があっても住み慣れた地域で、家で最期まで過ごして死んでいくという当たり前のことがむずかしくなってしまった。

決して医療費削減のためではなく、病床削減で溢れる死亡者を救うためではなく、在宅ケアをすすめる、というサービス提供側の視点からだけでなく、〝あなたが願うなら〟家でもだいじょうぶですよ、ということを伝えるために、おかえりなさいプロジェクトは「あなたの家にかえろう」を作成した。この冊子をきっかけに一人でも多くの人が、病気や障害があっても住み慣れた家にかえる、そして最期まで過ごすという選択肢を視野にいれ、自ら選択して、それをサポートする人達と共に一歩を踏み出すことを願う。

おかえりなさい
ただいま

そして、
（いってらっしゃい）
（おさきに）

いつもの会話が住み慣れた家で、それぞれの大切な人達との間でかわされる、そんな当たり前の風景が街のあちこちで見られるようになるといい。住み慣れた家で、地域で最期まで願う人を、家族や大切な人達が、ヘルパーが、ケアマネージャーが、訪問看護師が、近くの町医者がちょっとあわてたり、ほろっと涙を流したり、でもやっぱりほほえんだりしながらふわっと支える、そんな日を夢みて。

■ おかえりなさいプロジェクト事務局
〒六六一―〇〇四三 尼崎市武庫元町二丁目一二―一 さくらいクリニック
TEL〇六―六四三一―五五五五 FAX〇六―六四三一―〇六六六
http://www.reference.co.jp/sakurai/

くに

兵庫県に暮らす外国人労働者へ 温かい眼差しを

兵庫労働局雇用管理アドバイザー
職業生活担当　戸田　千穂子

平成二年頃、日本は好景気で求人が求職を上回り、殊に労働者不足は深刻でした。そこで法改正が行われ、外国に住む日系人も日本で就労可能となり、多くの企業で南米からの日系人を労働者として雇入れることになりました。日本人である祖父母が、その昔日本から南米の地へ移住し、その子どもや孫たちが日系人として日本へ働きに来るようになったのです。ラテン・アメリカで生まれ育った彼等は日本人というより現地の人です。日本語も充分話せない、文化・習慣も異なる国で育った人達です。それが遠い日本へ大挙してやってきました。飛行機が空港に着く毎に南米、主にブラジル・ペルー・ボリビアなどから大勢の日系の方が日本で働くため団体でタラップを降りてきました。グループ別にそれぞれの企業に迎えられ仕事場のある市町村の職場へ引き取られました。初期の頃の来日者には比較的若い働き盛りの単身の男性が多かったと記憶しております。働くといっても、労使双方とも言葉が分からず意思の疎通ができない、生活習慣も考え方も全く異なる初めての国ですから、祖父母の国とはいえ、随分辛い思いをしたことと思います。ただ彼等を受け入れ、仕事を一から教え一人前に育て上げた企業主たちのご苦労も大変だったことでしょう。

兵庫労働局では、外国人の職探しや雇用管理の改善に向けて事業主さんからの相談に応ずるため外国人雇用管理アドバイザー制度を設置しました。その一環として私は、外国人労働者職業生活部門を初めから担当しており、毎日のように外国人と接触する中で、企業の社長から会社内で外国人同士のトラブルが起こるとすぐ来てほしいと言われたり、また怪我人が出たり、言葉の壁から生ずる様々な揉めごとの折、応援を頼まれれば兵庫県内どこへでもその都度駆けつけています。できる限り穏便にそして本人たちが後々少しでも有利になるようなアドバイスをして、問題の解決に役立つように心がけて仕事をしております。

最初に来日した第一グループの日系人たち、当時は二十歳～三十歳の溌剌とした若者でしたが、二十年も経てばさすが男女とも身体の不調を訴える年齢となりました。男性の多くは力仕事の継続から腰痛や椎間板ヘルニアを病み、女性は食品会社の冷凍室のような処で冷凍肉を切ったり、パックしたりのラインの立ち仕事で、中座してトイレへ行くこともままならず、結果として女性特有の病気を患う人が少なくないのです。

日本人の嫌がる3Kの仕事を担ってきた日系人たち、永年働き身体を壊して役に立たなくなれば、ハイそこまで、もう無用おさらばでは困ります。労働者たちの多くは派遣業者の仲介で仕事に就いているため社会保険への加入者は比較的少なく、ただ国民健康保険へだけは皆さん個人で加入しております。

どうか日系人だけでなく、外国人労働者を使い捨てにしないよう思いやりと理解を持ってくださるようお願いしたいものです。

差別は誰を不幸にしているの？

山口県人権啓発センター事務局長　川口泰司

差別はされる側を不幸にしているのではない。する側を不幸にしている。このことを最初に気づかされたのは大学時代の恋愛だった。

ボクは大学生の時に付き合っていた彼女がいた。彼女の両親と会って、ボクが部落出身と言ってから、ずっと彼女の身内から交際を反対されていた。なかでも一番反対していたのが、彼女のおじいちゃんだった。実家に帰省するたびに、ボクとは別れたのかと猛反対。そのおじいちゃんが、最後はノイローゼ気味になり、体調を崩し入院した。

おじいちゃんが入院して、彼女の父は「お前が、あんな同和のもんとまだ付き合っているから、じいちゃんは倒れたんや」「今すぐ、病院に行って、謝ってこい」と彼女を病院に連れて行こうとした。彼女は誰よりもおじいちゃんのことを心配していた。でも、彼女は「なんで自分が謝らないといけないのか」と、病院には一度も顔を出さなかった。その二年後、おじいちゃんが亡くなった。

たまたまボクの部屋にいるときに、彼女の携帯にその知らせがあった。おじいちゃんが死んだ。そのことを聞いた彼女は泣き崩れた。しばらくたって、彼女が顔をあげ、涙を流しながら微笑んで、ボクにこういった。

「よかった…。これで一人差別者減ったね…。」

ボクはたまらなく胸が痛くなった。

「お前、なんでじいちゃんが死んだのに素直に悲しいって、言えれんのや！オレに気を使うなや」気がつけば、ボクは彼女にそう怒鳴っていた。

「分かっているよ。そんなのあんたに言われなくても、私が一番つらい。最後、二年間、顔見てないんよ…。悲しいよ…。」「でも、悲しいっていう気持ちと同じくらい、自分のなかでは、よかった、これでややこしく言う人が一人減った・・、って気持ちがあるんよ！素直に悲しいって、泣けれんのよ！」目に涙をいっぱい溜めて、そう叫ぶ彼女。

ボクはこの時に痛感させられた。部落差別があることで、不幸になっているのはボクじゃない。ボクは彼女の身内から反対され、差別を受けて傷つくことはあった。でもそれは不幸なんかではない。ボクの身内や仲間はみんな応援してくれていたから。でも、彼女は自分の身内から反対されていた。大好きなおじいちゃんが死んだときに、彼女に素直に悲しいって言えなくさせているのが部落差別。彼女もまた差別の被害者だった。

本当の意味で不幸なのは、ボクはおじいちゃんだと思う。孫ってかわいくて仕方がない。そのかわいい孫娘と最後、顔も見れず、ケンカ別れ。自分が死んだときに「よかった」と言われて死んだおじいちゃんが、ある意味、一番不幸だと思う。「おじいちゃん、あんたが訳の分からん、差別意識、世間体、周囲の目、そんなものにがんじがらめに縛られて生きてきたから、そのかわいい孫を傷つけたんよ。その傷は一生消えないよ」とボクはおじいちゃんに言いたい。

差別はひとを不自由にする。だから人権学習を通して、そんな差別意識にがんじがらめに縛られ、不自由に生きている自分から解放されて欲しい。だからあなたに学んで欲しい！

自由な心、認め合う関係、いきいきライフ

～男女共同参画社会からの贈り物～

大阪心のサポートセンター　代表　宮本　由起代

一九九九年に「男女共同参画社会基本法」が成立して、私たちは性別にかかわらず個人が力を発揮でき、自分を生かせるような社会の形成に取り組んでいます。しかし、男女共同参画って何？男女雇用機会均等法やＤＶ防止法など自分にあまり関係がないという意見をよく聞きます。そこで、もっと身近なテーマ、男と女の関係性にみる男女共同参画について考えてみましょう。

仕事を通じて多くの人と出会いますが、年齢にかかわらず親密な関係になるほど男女のあり方があまり変化していない、と感じることがあります。「男はたくましく、女は優しいものだ」という決めつけはよくないと頭ではわかるが、感情がついていかないという言葉をよく聞きます。また社会には、はっきりものを言う女はきつくて可愛げがない・怒る女はヒステリックで困る・弱音を吐く男はダメだ・男ならビシッと言うことをきかせろという通念があって、私たちを脅かします。

このような環境のなかで、私たちは本音を出すことを躊躇して社会の期待に添い、役割をこなし、気持ちを溜め込むことになります。怒りが満杯になると、男は「家族のために働いているのに文句あるか」「誰のおかげで飯が食える」とどなり、「女はいいね、いやなら気軽

に会社を辞めて」とイヤミを言うことになります。女もぷっつんすれば「誰に育ててもらった。それが命がけで産んだ女に言うことか」と逆切れしたいけど、社会の仕打ちが恐ろしい。そこで、「そんなに養うのがいやなら、独身でいればよかったのに」と遠回しの攻撃になり、「そんな言い方をしなくても……」と言葉を飲み込むことになります。こうなると分かり合えるコミュニケーションはとても無理です。

そこで、「出世をそんなに期待されると、僕はとても気が重くなる」「職場でつらい事が多く、もうダメだと音をあげたい時があるんだ」「取り残されたように思って、寂しい」と本音を出せば、会話が進みそうに思いませんか。弱みを出すには、本物の強さが必要になります。女も「責任を持って仕事をして、認められたいです」「家事は苦手で苦痛なの。そんなに頼られても困る」「家族の世話だけでは、幸せと感じないわ」と言えたら、心が楽になるばかりか、相手もあなたの気持ちを初めて知ることができます。

「べき」思考や通念から解放されると、男女ともに自分の弱さも強さも自由に出せて、そのことで心が揺れることはない。本音を言えば相手を攻撃しなくてもすみ、コントロール・ゲームから降りられます。

また、男女の関係性では固定観念に縛られていると、男は自分の思いを通すことに夢中になり、自分が納得するまで話をやめないという傾向があるようです。女のほうは、相手が話し終わるまで聞かねばならないという思い込みから、その場にいて延々と続く相手の話を我慢して聞き、ひたすら終るのを待つパターンが多いようです。このときの気持ちは、被害者意識でいっぱいです。

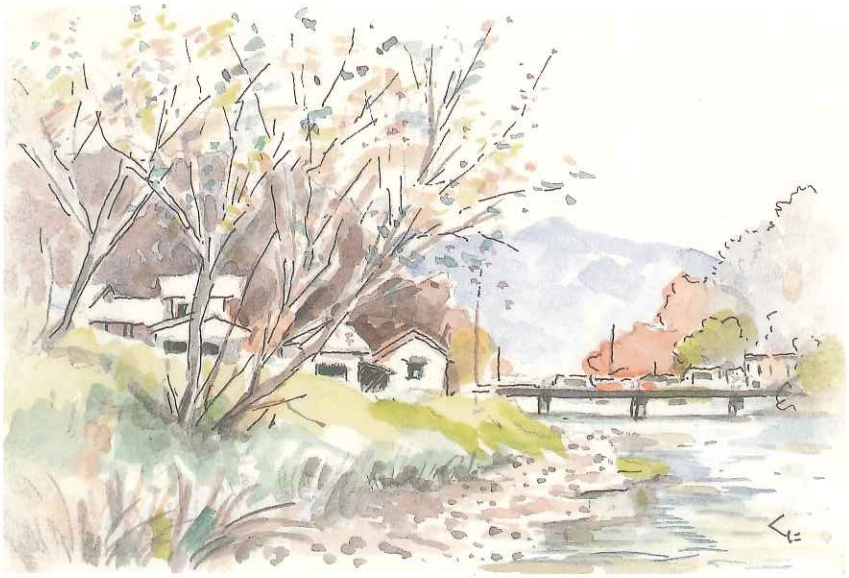
男女共同参画とは、この二人のあり方を見直しましょうということです。一方の気が済んでも、相手が被害を受けていると、いい関係は築けません。「あなたの言うことはわかったけど、自分のことは自分で決めるわ」と言える関係、居続けて被害を受けるよりも、席を立って被害を防げる関係づくりが大切だと思います。

どこにいても誰もが尊重され、抑圧されないような社会を、皆で力を合わせて築いていきましょう。

介護難民が生まれる根を絶つ道

新潟県立看護大学学長　中島　紀恵子

日本中の津々浦々で核家族化が進み、共働きがあたり前になっています。二人暮らしまたは一人暮らしの六十五歳以上の高齢者世帯が全世帯の約半分を占めること、この割合は年ごとに益々膨らみ、八十歳以上になっても二十五％は一人で暮らすようになっています。老老介護は誰にでも起こり得ることです。丹波市民のみなさんも日々実感していることだと思います。介護保険はその時にも、何とか自立して今までのまちで生きたいというあたり前の願いを支え合う仕組みとして始まりました。介護保険制度が間違った選択ではなかったと八十％以上の人が考えていることは諸調査からわかっています。利用者の多くは助かったと言っています。しかし、現実には、「支えてほしい肝心の時には何も無し」と思う声ばかりが大きい。早くも限界にきていると考えている為政者も少なくないようです。なにしろ、利用者は制度発足当初の予想を超えて増えています。生活保護を受けている高齢者世帯も増えています。一方の運営市町村の多数は財政難です。介護認定を見直して、サービスを受ける人の絞込みも始まりました。にも拘らず私たちの保険料の負担金は増えています。また、高齢者世帯



の収入の殆どは年金のみ。「認知症と家族の会」の調査によると四割以上の人が月額五万円以上の赤字をかかえながら介護しています。もし入院することになったらどこから費用をひねりだすか、不安も大きい。だから、手に入れられるサービスの限定額を抑制してしまいます。介護負担感情と閉塞感は、こうした中で起きやすい。いま正に、エージング・プア（年をとるというだけで貧しさを経験させられてしまう）の世界が各地の其所彼所に広がり始めました。高齢者虐待は、これが煮詰まった形といってよいと思います。

コムスンの問題を通して、介護労働者のワーキング・プアの実態も明らかになってきました。これでよいのか。老いを生きゆく過程は、生老病死の全てが身近にある世界です。だから、生きている限りはきちんと生きぬきたいと願います。高齢者は老いていく中で学習し成長発達し、生き方上手にもなれます。認知症も同じことです。決して認知症の人々は何もわからなくなる人ではありません。むしろ認知症を患う人たちの自己尊厳に対するパワーは、私たちみんなが普通に持っているパワーより大きいと思います。しかし、認知症の人がこのパワーを出すには支える手がいります。一番手に介護労働者の存在があります。いま、この人たちが人間らしい賃金の保障もなく傷ついています。彼らが専門職業人として働く誇りのもてる社会的評価と、働きがいのある職場環境にするために、私たちはどのような地域に住んでいようとも関心を寄せて、発言しなければならないと思います。エージング・プアとワーキング・プアの二重苦が介護難民を生んでいるからです。この悪い鎖をたち切るために、丹波市のまちづくりの共通課題としてみんなで何度でも話し合ってほしいと願います。

第27回全国中学生人権作文コンテスト
兵庫県大会優秀賞受賞作品

自分の命をみつめて・・・

丹波市立柏原中学校　一年　八木　遥

今年もまた暑い夏が巡ってきた。夏は私にとって特別な季節でもある。

六十二年前、私の祖父は広島市の中学校に通っていた。中学生といっても学校で授業を受けることなく、毎日学徒動員のもと、軍需工場で働いていたそうだ。その年、すでに戦争は悪化し、日本各地の大都市は空襲をうけ壊滅状態であった。

「広島も危険だから早く疎開するように。」

と丹波の家族に言われ、実家にもどった二ケ月後に原爆が投下された。住んでいた家は壊れ、広島時代の友達とは誰も連らくできなくなったそうだ。もし、あのまま祖父が疎開していなければ・・・市の中心部にいてまちがいなく命を落としていたはずだ。そうなれば当然、私はこの世に生まれてくることはなかった。母から

「遥の命は広島からつながっている。」

ということを毎夏聞かされ、自分の命の尊さを感じる。だから夏は自分の命と向き合う特別な季節なのである。

私は小学生の時、一度広島を訪れたことがある。自分の命のルーツを求めるような気持ちでドキドキしながら降りたったのを覚えている。仕事のため広島に残り、被爆した祖父の父が生前言い残していた、広島の街の記憶・・・。川が人で埋まり、生きている人も死んでいる人も、同じように焼かれ、皮膚のたれ下がった人々が助けを求めてきたけれど、どうしようもなかった・・・と。

実際自分の目で見た現在の広島は、静かな街並みが広がり、原爆の恐ろしさは何一つ感じ取れなかった。しかし、一歩原爆資料館に足を踏み入れると、過去の恐ろしさが私に迫ってくる。テレビや本で見たり聞いたりしたのとは違い、実際に見る展示品は持ち主を失い、どこかさみしそうだった。それと同時に一瞬前まで生きてそれを使っていた人がいたのだと私達に原爆

の恐ろしさを教えてくれている。私達はその声を聞かなくてはならない。
もう二度とあのような出来事が起こらぬように。
しかし、その事を誰よりも心に止めておかなくてはならないはずの政府の人間が、
「原爆投下はしょうがなかった。」
なんて言ったという事が最近あった。私は腹が立った。中学生の私にでもわかる事なのに、一番よく知っておかなくてはいけない大人がわからないのか。私はその言葉から、日本はまた同じあやまちを起こすつもりではないかと思った。そうならないためにも、私達が戦争や原爆についてもっとたくさん学んだり、話したりして平和の輪を広げなくてはならない。
その一環として、七月二十五日に山南町で行われた戦争についての語り部、「この子たちの夏」を見に行った。そこでは、被爆した親子の手記を有名な女優さん達が読まれた。その中で、死ぬ最後の最後まで
「勝て勝て日本！！」
とさけびながら死んでいった子や、親に会えぬまま、さみしく死んでいった子など、たくさんの手記が読まれていった。個人として生きるのではなく、まちがった国家権力に押しつぶされていった当時の人々の生き方が悲しかった。
終わった後のフリートークで私の姉が、
「もっとたくさんの中高生の前でもやってもらいたい。」
と発言していたが、私もそう思う。なぜなら、原爆の経験がない私達だからこそ、過去の事だと言って戦争という恐怖から目をそらさず、立ち向かっていかなくてはいけないからだ。
今、世界では、あちこちで内戦や紛争が起こり、テロが横行している。広島や長崎に投下された原爆は今では、核ミサイルとなって、数えきれないほどの数となり、ボタン一つで世界中の空をめがけて、いつでも発射準備ができている。これでは何のために、広島、長崎の人々が傷つき、亡くなっていったか・・・過去の歴史に学ばずして、あきらかにまちがった方向へと人類は歩んでいる。世界で唯一の被爆国の日本でさえ、政府はそれへの警鐘をならすどころか・・・日本の核保有について論じてもいいのではないかとか、先ほどのまったくあきれた発言が飛び出す始末。世界に誇れる平和憲法九条さえ見直そうとする大人達に私は、何も期待できない。
これからの日本の動きにきちんと反論していけるよう・・・また、どうすれば核廃絶を地球規模で行えるか、私達は急いで学び、考え、行動できる力をつけなくてはいけないと思う。
自分の命と向き合う夏に、今年はあせりのような思いを感じる事が多かった。

（川上住野）

（奥野悦子）

じんけん丹波（No 3）

平成二十年二月発行

編集・発行　丹波市生活部人権啓発センター
兵庫県丹波市氷上町成松字甲賀一番地
TEL　〇七九五―八二―〇二四二
FAX　〇七九五―八二―一八二一

挿絵　臼井邦昭

表紙写真　村岡正廣

PRINTED WITH SOY INK
植物油のみを使用した、環境にやさしいインキです。
再生紙を使用しています。